

角膜クリニック 第3版

眞鍋 禮三, 木下 茂, 大橋 裕一, 下村 嘉一 監修
西田 幸二, 井上 幸次, 渡辺 仁, 前田 直之 編

待望の『角膜クリニック 第3版』が刊行された、などと書くと、いかにも月並みな書評の書き出しになってしまうが、しかし1990年の初版、2003年の第2版を長らく愛用してきた評者にとって、まこと「待望の」あるいは「待ちに待った」第3版というのが偽らざる感想である。今回、31年前の初版を久しぶりに取り出してみたのだが、多くの付箋や下線が残っており、よく勉強させてもらったという記憶がよみがえってきた。角膜を学ぶ眼科医が必ず手に取る良書であった。赤本と呼ばれた初版、新赤本と呼ばれた第2版とも、すでに背表紙は色あせて赤くはない。時の流れを感じる。

さて、18年ぶりの改訂である。阪大眼科角膜グループの伝統を反映した、非常に実務的で、無駄のない優れた教科書という印象は変わらない。今回最も大きな変化と感じたのは、基礎編という項目をなくしたことである。前版までは、生理・生化学・発生・免疫・微生物学・創傷治癒・薬学・遺伝子などの知識が、巻末にまとめて記されていた。今版では、それらの基礎知識を、臨床編や治療編の中に入れて込んで解説するようになっている。これにより基礎知識と臨床知識を結び付けやすくなり、角膜の機能や疾患をより有機的に理解できるようになった。

新しく追加された項目としては、前眼部OCT、波面収差解析、角膜生体力学特性、抗原検査・抗体検査・PCR、遺伝子検査などがある。また、角膜パッチ移植の発展や上皮移植・培養上皮移植の臨床導入を受けて、角膜移植の項が充実した。その他にも、人工角膜、フェムトセカンドレーザー、角膜クロスリンキン

グ、涙液検査などに関する解説が紙幅を増し、最新の医療状況を反映したものとなっている。

このように明らかに内容の充実が図られた本書であるが、それにもかかわらずページ数の増加が最小限に抑えられていることは特筆しておきたい。改訂に伴ってボリュームを増していく本が少なくない中、本書では読者の使い勝手や価格を考えて編集陣が工夫されたのであろう。このあたりも阪大流であろうか、好感が持てる。

一方で、あえて欠点を挙げると、初版や前版から同じ写真が用いられているものが少なくないことと、引用文献が古いことが若干残念であった。古い写真と新しい写真ではクオリティが違う。次回の改訂に期待したい。

本書の刊行と時を前後して、初版から監修を務めてこられた眞鍋禮三先生の訃報が届いた。おそらく、本書の完成を目にされることはなかったと思われる。しかし、眞鍋先生が構想された国産角膜専門書が30年を超えるロングセラーとなり、昭和・平成を経て令和時代に第3版が刊行されたということは、眞鍋先生が育てられた「角膜学」が日本に広く根付いたことを示しているのではないかと思う。日本における角膜臨床のレベルアップへの貢献は、計り知れない。

筑波大教授・眼科学
大鹿哲郎

B5・頁400 2021年07月
定価：22,000円（本体20,000円＋税10%）
[ISBN978-4-260-02043-5] 医学書院刊